

# 結果構文から見るパーリ語の過去受動分詞

稲葉 維摩

## 1. はじめに

本論文はパーリ語の過去受動分詞を結果構文 (resultative construction) の観点から捉える。結果構文とは、先立って行われた動作による結果的状态を表すものである。

パーリ語の過去受動分詞をどのように定義するかは一致しておらず、これまでに <sup>(1)</sup> anterior や能格型、アスペクトの区別といった見方が示されてきた。しかしながら、どの見方も過去受動分詞の一面にしか当てはまらないという問題がある。

過去受動分詞に結果構文の観点を取り入れると、従来よりも問題の少ない理解が可能になると考えられる。本論文では、過去受動分詞が結果構文として理解されることを述べる。<sup>(2)</sup> パーリ語の過去受動分詞は、自動詞文の主語 (以下、S) の結果的状态を表す主語の結果構文、他動詞文の被動作主 (以下、P) の結果的

---

(1) 本論文はヴェーダ語・サンスクリット語の時制形式である完了や、アスペクトの完了相 (perfective aspect) などとの混同を避けるため、稲葉 (2019ab, 2020) と同様、いわゆる現在完了などのパーフェクトを anterior と呼ぶ。anterior については本論の3節で説明する。

(2) 本論文は過去受動分詞の訳し方を提案するのではなく、仕組みを検討することを目指す。本論文では、とくに他動詞から作られる過去受動分詞の和訳が受動であったりなかったりするが、受動かどうか議論になる場合以外は、できるだけ不自然な受動にならないようにした。

状態を表す目的語の結果構文、動作主（以下、A）の結果的状态を表す所有の結果構文に当たると考えられる。本論文では主語の結果構文と目的語の結果構文について述べ、所有の結果構文については改めて論じることにする。<sup>(3)</sup>

本論文が主な研究範囲とするテキストは、稲葉（2019ab）と同様、Dīghanikāya（以下、DN）、Majjhimanikāya（MN）、Saṃyuttanikāya（SN）、Aṅguttaranikāya（AN）である。

## 2. 過去受動分詞の基本的な振る舞いと名称について

パーリ語の過去受動分詞は、主に接辞  $-(i)ta-$ 、 $-na-$  によって作られる。名詞を限定（修飾）したり、分詞自体が名詞になったり、節の述語となる動詞的形容詞である。

派生もとの動詞が自動詞か他動詞かで過去受動分詞の振る舞いが異なる。自動詞から作られた場合は、過去受動分詞の語形変化によって標示される性・数・格が、もとの自動詞文の S に一致する。他動詞から作られた過去受動分詞は基本的に態（voice）が転換し、もとの他動詞文の P に一致する。A は必須でなくなり、言及される場合は周辺的な格の具格か属格で現れる。この点で、他動詞から作られた過去受動分詞は受動表現と関わっている。しかし、動詞によっては態が転換しないこともある（Hendriksen 1944: 19-34, Oberlies 2019: 618-625）。

(1) は態の転換が起こっていない例、(2) は転換が起こっている例である。(1) では、過去形  $atthāsi$  「立った」（3人称単数）の直後の節に、同じ動詞の過去受動分詞  $thita-$  が使われている。分詞は限定する人物に一致している。(2) は離れた場所にたやすく瞬時に移動する際の表現である。定動詞  $pasāreyya$  「伸ば

---

(3) 本論文では過去受動分詞とともに使われる動詞  $hoti$  「なる、生じる」、 $atthi$  「である、存在する」を扱わないこととする。これらは助動詞と言われているのだが、その役割がはっきりしているとは言い難く、個別に研究される必要があると言えるからである。

(4) いくつかの語では他の接辞によって過去受動分詞が作られる。形態については、Geiger (1916), Hinüber (2001), Oberlies (2019) によって、歴史的な面と合わせて詳述されているので、本論文では扱わない。

す」と *sammiñjeyya* 「曲げる」(いずれも希求法3人称単数), それぞれの過去受動分詞 *pasārita-* と *sammiñjita-* が交互に使われている。過去受動分詞が限定する *bāhā-* 「腕」は, それぞれの定動詞の P である。

(1) DN I 50 *atha kho rājā māgadho ajātasattu vedehiputto yena bhagavā ten' upasaṅkami, upasaṅkamitvā ekam antaṃ aṭṭhāsi, ekam antaṃ ʔhito kho rājā māgadho ajātasattu vedehiputto ... udānaṃ udānesi.*

その時, マガタ国王アジャータサットゥ, ヴェーデーヒーの息子は世尊のところに近づいた, 近づいてから, 一方に立った, 一方に立ったマガタ国王アジャータサットゥ, ヴェーデーヒーの息子は…感興のことばを言った。

(2) DN I 222 *atha kho so kevaddha bhikkhu seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarāhito mama purato pātur ahoṣi.*

ケーヴァッタよ, その時, その比丘は, 例えば力持ちの人が曲げている腕を伸ばすように, あるいは伸ばしている腕を曲げるように, まったく同様に, 梵天界で消えて, 私の前に現れた。

どの過去受動分詞も先立つ動作によって生じた結果的状态を表している。

(1) で過去受動分詞が限定する人物は, 先立つ定動詞の S であり, 一方に立った結果, その場所に立っている。(2) の過去受動分詞で表される伸ばした状態の腕, 曲げた状態の腕は, それぞれ定動詞の動作「曲げる, 伸ばす」が先立って行われていることは言うまでもないだろう。

本論文ではこの分詞を「過去受動分詞」と呼ぶが, 研究者によって異なる名称が使われている。例えば, Hendriksen (1944) は “perfect passive participle”, Hinüber (2001) は “Partizip Präteritum”, Oberlies (2019) は “verbal adjective” と呼ぶ。水野 (1955) は「過去受動分詞」, Peterson (1998) も “past passive participle” と呼んでいる。「過去受動分詞」という名称はこの分詞の振る舞いに合わない面があるため, 避けられる傾向にある。<sup>(5)</sup>しかし, 本論文があえて過去受動分詞

と呼ぶのは、その名称がこの分詞の性質や問題を端的に表していると思われるからである。

名称内の「過去」について、この分詞は単に過去のことを表すのではなく、むしろ動作が起こった後に関わっている。このことは先行研究において、*anterior* として捉えられてきた。

「受動」については問題視されている。もとの動詞が自動詞の場合や一部の動詞では受動にならないからである。研究者によっては、他動詞から作られた過去受動分詞の文を受動文ではなく、能動文として理解する（このことについては4、5節で扱う）。しかし、能動文に解釈するとしても、態が転換していることに変わりはない。むしろ本論文で述べる結果構文の観点からすれば、態の転換こそ重要な特徴の1つである。<sup>(6)</sup>

パリー語には、それほど多くはないけれども、過去能動分詞という形式がある（Hendriksen 1944: 10-11, Oberlies 2019: 626-627 など）。過去受動分詞に接辞 *-vant* あるいは *-ävin-* を付して、能動の意味を表す分詞を派生する。この派生はもちろん、もとの過去受動分詞が受動であるからこそ行われる。

これらのことから、本論文では分詞の性質と問題を明確にするために、あえて過去受動分詞という名称を用いることにする。

### 3. 結果構文について

本論文は、結果構文の観点から過去受動分詞を見ていく。結果構文は状態変化を伴う動詞から派生され、先立つ動作を踏まえた結果的状态を表す。Nedjalkov and Jaxontov (1988) によって詳しい類型が示されている（さらに Maslov 1988; Bybee and Dahl 1989; Bybee, Perkins, and Pagliuca 1994: 51-105 など）。結果構文は

---

(5) 分詞の名称に“passive”を入れる Hendriksen (1944: 9) と Peterson (1998: 24-25) も、この名称は実態に合わないと言っている。しかし、伝統的に使われているという事で、両者は“passive”を含んだ名称を用いている。

(6) 同じように振る舞う分詞は他の言語にもあるのだが、Haspelmath (1994) はそれらが“resultative participle”として理解されることを述べる。ここで言われる“resultative”は本論文の結果構文と同じものである。

anterior と区別される。anterior はパーフェクトと呼ばれるものと同じで、いわゆる現在完了や過去完了などはこの anterior に当たる。結果構文の文法的な区別は言語によって異なる。結果構文が他の意味と重なっていたり、区別されない場合もあるのだが、anterior と結果構文の違いはおおよそ次のようにまとめられる (Nedjalkov and Jaxontov 1988: 15-17 に基づく)。

- anterior は後続時点に関連性のある動作を表すが、後続時点における影響についてははっきり表されない。対して、結果構文は先立つ動作によって生じる後続時点での結果的状态を表す。
- anterior はどんな動詞からも作られるが、結果構文は状態変化を伴う動詞から作られる。
- anterior は他動詞から作られても態の転換が起こらないが、結果構文は態が転換して自動詞文になる。
- 時間表現の副詞との関係が anterior と結果構文で異なる (一時的な状態を表す結果構文は副詞 “still” と共起できる、など)。

Maslov (1988) は結果構文と anterior をどちらも広い意味でのパーフェクトのもとに捉える。パーフェクトとは、2つの時点、すなわち動作が行われた時点とそれに後続する時点を含むことと定義される。結果構文と anterior はどちらもこのパーフェクトの特徴を持っており、Maslov (1988) では結果構文が状態パーフェクト (statal perfect)、anterior が動作パーフェクト (actional perfect) と呼ばれる。2つの時点の内、状態パーフェクトは後続する時点を強調し、動作パーフェクトは動作が行われた時点の方を強調する。

通時的な面では「結果構文 > anterior > 単純過去や完了相 (perfective aspect)」という方向で意味が変化することが知られている (Maslov 1988; Bybee and Dahl 1989; Bybee, Perkins, and Pagliuca 1994 など)。

次節に紹介する Peterson (1998) は、通時的に先立つヴェーダ語の過去受動分詞を結果構文としている。過去受動分詞を結果構文と見る点では本論文と近いのだが、結果構文の通時的变化に基づいて、パーリ語の過去受動分詞の方は

anterior と捉えている。この変化は、さらにパーリ語の内部で過去受動分詞が単純過去を表すようになるという Hendriksen (1944: 61-68) の指摘にも通じる。

たしかにパーリ語はヴェーダ語と比べて様々な言語変化が起きている。しかし、パーリ語が通時的に後の言語だからといって、結果構文が必ず anterior に変化していると考えする必要はない。上述の通時的変化は方向性を示しているのであって、それがいつどんなふうにかかるかは個々の問題だからである。パーリ語の過去受動分詞がどのようなはたらきを担っているかは、まずその言語の中で体系づけられるべきである。<sup>(7)</sup> この点で、本論文は Peterson (1998) と異なる立場にある。

さて、Nedjalkov and Jaxontov (1988) は結果構文をいくつかの種類に分けている。まず、先立つ動作の S の結果的状态を表す「主語の結果構文 (subjective resultative)」と、P の結果的状态を表す「目的語の結果構文 (objective resultative)」がある。主語の結果構文は自動詞から、目的語の結果構文は他動詞から派生される。さらに、他動詞から作られる結果構文が先立つ動作における A の結果的状态を表す場合がある。この時、P が A の所有・所属関係になる。これは「所有の結果構文 (possessive resultative)」と呼ばれる。他に場所の結果構文、非人称の結果構文といったものがある。

## 4. 先行研究

### 4. 1. Hendriksen (1944)

管見の限り、パーリ語の過去受動分詞を詳しく扱った研究は主に3つある。ここではその3つの研究を紹介し、到達点や問題点を整理する。

Hendriksen (1944) はパーリ語の非定形動詞の研究である。様々なテキストから多くの例文を引き、非定形動詞の様々な使われ方を論じている。文脈の重要性や話法の違いという観点を指摘していることは、大変重要と言える。

過去受動分詞についても重要な指摘が多い。まず、Hendriksen (1944) は過去

---

(7) 例えば、パーリ語では文脈や副詞によって、過去形が anterior を表すことがわかった (稲葉 2019a, 2020)。

受動分詞を“perfect passive participle”と呼ぶ。“perfect”と言っているのは、この分詞が過去だけに言及しているのではなく、現在にも関連していること、つまり anterior であることによる。名称の“passive”については、自動詞から派生した場合など、必ずしも受動になるわけではないために問題視している (p.9)。

Hendriksen (1944) は主に、動詞の形容詞としての基本的な面と述語として使われる場合の2点から、過去受動分詞を検討している。基本的な面については、多くの例文に基づいて、2節で紹介したような過去受動分詞の振る舞いを詳述している。

述語として使われる過去受動分詞は、時制やアスペクトを区別する形式として考えることができる。Hendriksen (1944: 50-52) は過去受動分詞と定動詞との関係について、過去受動分詞は“present-past”を表し、定動詞の過去形は“pure past”を表すと述べる。“present-past”は本論文で言う anterior に相当する。“pure past”は単純過去である。

Hendriksen (1944: 54-57) は、過去受動分詞における態の転換を受動文と“inverted construction”に区別する。“inverted construction”は能動文に相当し、能動文として訳すべきだとされる。受動文と“inverted construction”の区別として、Hendriksen (1944) はAの有無と語順の違いをあげる。それによると、受動の場合はAが必須でなくなり、Pが文頭に置かれる。“inverted construction”の場合はAが必須で、過去受動分詞が文頭に置かれる。

しかし、この見方には問題がある。Hendriksen (1944) 自身が言うように、この区別は一貫しているわけではない。むしろ翻訳の問題のようにも見えるのだが、受動と能動の区別が語順やAの有無によって文法的になされているかどうかは、簡単に片付けられる問題ではなく、詳しい研究が必要である。このことは5節でも取り上げる。

Hendriksen (1944: 50-68) は話法を“communication”と“narration”に区別し、使われる動詞の形式が異なると指摘する。それによれば、過去受動分詞は主に“communication”で、過去形は“narration”で使われる。また、初期のテキストではほとんどないが、後期のテキストでは過去受動分詞も“narration”で使われる。

話法の違いで時制形式の出現が異なるという指摘は興味深いが、注意すべき点も少なくない。Hendriksen (1944) の“communication”は稲葉 (2019ab) における直接話法に、“narration”は語りに当たる<sup>(8)</sup>。稲葉 (2019ab, 2020) や本論文の扱うテキストはHendriksen (1944) における初期のテキストに当たるのだが、過去形と過去受動分詞のそれぞれが一方の話法に限定的とは言い難い。

以上に紹介した限りでも、Hendriksen (1944) には研究課題となるような指摘が多い。その内容を現代の視点で検討し直すことが必要だろう。

#### 4. 2. Peterson (1998)

次の2つの研究は、述語として使われる過去受動分詞を時制やアスペクトを区別する形式として捉えようとするものである。

Peterson (1998) はパーリ語の過去受動分詞について、受動表現であることを否定し、能格型の迂言的なパーフェクト (本論文で言う anterior)<sup>(9)</sup> であると捉えた。能格型とは自動詞文・他動詞文における主要な項 S, A, P の扱われ方の1種で、自動詞文の S と他動詞文の P が同じ扱いを受ける (Dixon 1994, Bickel and Nichols 2011 など)。これに対して、自動詞文の S と他動詞文の A が同一に扱われるのを対格型と言う。格標示の面だと、能格型では S/P が同じ格 (絶対格) で、A が異なる格 (能格) で現れる。対格型では S/A が同じ格 (主格) で、P が異なる格 (対格) で標示される<sup>(10)</sup>。

さて、Peterson (1998) は能格性をめぐって共時的・通時的な面で様々なことを論じているが、主な点を要約すれば、次のようになるだろう。

言語の歴史的にパーリ語より古いヴェーダ語では、過去受動分詞は結果構文であった。結果構文は通時的に anterior に言語変化する。そのため、パーリ語

---

(8) 直接話法の中にも語りがあることに留意する必要がある。Hendriksen (1944) は“communication”に著者のコメントを含める。

(9) 他に、Peterson (1998) の要点をまとめた Peterson (1999) がある。

(10) 仏教学の関連で例をあげるならば、サンスクリット語が対格型の言語であり、チベット語が能格型の言語である。古典チベット語では具格と呼ばれる格が能格に当たる (長野 1989: 764-765, 星 2016: 131-132)。



の過去受動分詞は *anterior* になっている。パーリ語の定動詞では S/A が主格、P が対格で標示されるのだが、過去受動分詞を使った *anterior* では S/P が主格、A が具格の能格構造をとる。しかしながら、この能格構造は格標示のみに現れ、統語論と語用論の面では S/A の組のままである。したがって、パーリ語はまだ完全な能格型になっておらず、後のインド・アーリヤ諸語が能格型になっていく初期の段階に位置づけられる。

中期インド・アーリヤ諸語の内の後期の言語や、ヒンディー語などの近代インド・アーリヤ語は、文法の一部に能格構造を持つ。そのため、Peterson (1998) は結果構文の観点からインド・アーリヤ語における能格構造の通時的な起源の 1 つを示し、インド・アーリヤ語の能格研究にパーリ語の分析を提供する数少ない研究<sup>(11)</sup>になっている。

先に述べたように、*anterior* では態が転換しないため、過去受動分詞を *anterior* と捉えると、態の転換が問題になる。しかし、Peterson (1998) は過去受動分詞を受動文とせず、能格型の能動文と捉えた。この見方は、*anterior* であるのに態が転換するという問題を解決することにもなる。

しかしながら、Peterson (1998) にはパーリ語の共時的な面で多くの問題がある。ここでは主に 3 点を指摘したい。まず、コーパスの狭さである。Peterson (1998) は律をコーパスとするのだが、その範囲は Pali Text Society 出版のテキスト全 5 巻の内、第 1 巻の II-IV 章 (pp. 101-178) のみである。この範囲では多様な例文を集めるのは難しく、結果的に考察にも影響が及ぶと考えられる。このことは次節に関係する。

次に、Peterson (1998) が示す例文の問題を指摘する。Peterson (1998) は本論文が P で示す被動作主の略号に O を使っているため、Peterson (1998) の議論を取り上げる場合に限って被動作主に O を使う。また、Peterson (1998) の例文にはグロスが付いているのだが、本論文に引用する際はグロスを省略した。

Peterson (1998) はしばしば、もとのテキストを省略して引用するのだが、そ

---

(11) 例えば、Dahl and Stroński (2016b) や Dahl and Stroński (2016a) に収録される諸論文を参照。

れによって Peterson (1998) の分析がもとのテキストに当てはまらなくなる場合がある。次の (3), (4) は Peterson (1998: 148) の例文 (119) とその分析の引用である。<sup>(12)</sup> Peterson (1998) はパーリ語における S, A, O の扱われ方について、同一指示語の省略が S/A の間で起こるため、統語的には対格型であると述べる。(3) には過去受動分詞が出ないけれども、a 節と b, c 節の間で同一指示語の省略が起こっている。a 節の S である “rājā Māgadho Seniyo Bimbisāro” 「マガダ国王セーニヤ・ビンビサーラ」(男性主格単数) は b, c 節の A と同一であるため、b, c 節では省略されている。(4) はそれを記号で示したものである。括弧付きの A が省略を表している。

(3) Peterson (1998: 148)

a: atha kho rājā Māgadho Seniyo Bimbisāro [...]

S

b: bhagavantam abhivādetvā

O

V

c: padakkhiṇam katvā

O

V

d: pakkāmi.

V

‘And then King Māgadha Seniya Bimbisāra [...] saluted the Lord, walked around him (keeping his right side towards him) and went forth.’

(4) Peterson (1998: 148)<sup>(13)</sup>

a: S<sub>NOM</sub>

↓

(12) 同じ文が Peterson (1998) の例文 (22) にも引用される。

(13) (4) で使われている略号は以下の通りである。NOM = nominative. ACC = accusative. ABS = absolutive. AOR = aorist.

b:	(A)	O <sub>ACC</sub>	V <sub>ABS</sub>
		⇓	
c:	(A)	O <sub>ACC</sub>	V <sub>ABS</sub>
d:			V <sub>AOR</sub>

ところが、(5) にあげた実際のテキストはこの分析に合わない。ボールド体の部分が (3) a-d 節である。問題になるのは、Peterson (1998) が (3) a 節で省略した部分である。(5) では、その省略部分に下線を引いた。実は下線部に、先立つ定動詞 sandassesi 「示した」、samādapesi 「受け取らせた」、samuttejesi 「鼓舞した」、sampahaṃsesi 「喜ばせた」(すべて過去形3人称単数) それぞれの過去受動分詞と、具格の名詞 bhagavatā 「世尊」がある。

(5) Vin I 101-102 atha kho bhagavā rājānaṃ māgadhaṃ seniyaṃ bimbisāraṃ dhammiyā kathāya sandassesi samādapesi samuttejesi sampahaṃsesi. **atha kho rājā māgadho seniyo bimbisāro bhagavatā dhammiyā kathāya sandassito samādapito samuttejito sampahaṃsito utthāyāsanaṃ bhagavantam abhivādetvā padakkhiṇaṃ katvā pakkāmi.**

そこで世尊は、法話でマガダ国王セーニヤ・ビンピサーラに示し、受け取らせ、鼓舞し、喜ばせた。そこでマガダ国王セーニヤ・ビンピサーラは、世尊によって法話で示され、受け取らされ、鼓舞され、喜ばされ、席から立って、世尊に挨拶をして、右回りをして出発した。

(5) では、筆者の理解によって下線部の過去受動分詞を受動に理解した。しかし、Peterson (1998) は受動でなく、能格型の anterior と理解しているので、それに従えば、(3) a 節と (5) の下線部は (6) のように解釈されるはずである。(3) a 節で S とされていた名詞が O であり、具格の bhagavatā が A である。したがって、(4) a-c 節の関係は O<sub>NOM</sub> → (A) → (A) になるのだが、Peterson (1998) の分析と違ってしまう。

(6) atha kho rājā māgadho seniyo bimbisāro bhagavatā dhammiyā kathāya

O

A

sandassito samādapito samuttejito sampahaṃsito utthāyāsanaṃ

V

V

V

V

V

そこで世尊は法話でマガダ国王セーニヤ・ビンビサーラに示し、受け取らせ、鼓舞し、喜ばせた。〔マガダ国王セーニヤ・ビンビサーラは〕席から立  
って<sup>(14)</sup>

最後に、動詞の分析に関する問題を指摘する。(7)、(8)は Peterson (1998: 138, 141-142) の例文 (110) と (113) の引用である。Peterson (1998) は、(7) a 節の現在形 *nassanti* と b 節の *ḍayhanti* (いずれも 3 人称複数、意味は後述) を受動としている。(8) は (7) と並行する文で、定動詞が過去受動分詞に変わっている。どちらも同じ話からの引用である。僧侶がほったらかしにしてボロボロになった衣を着て、みすぼらしい姿でいたため、僧団の問題になったという内容である。Peterson (1998) は (7) a-c 節を受動文と考えているので、もとの動詞は他動詞に理解していると思われる。(8) a 節の *cīvarāni* 「衣」(中性主格/対格複数) を O にしているのは、過去受動分詞が能格型と考えられているためである。

(7) Peterson (1998: 138)

a: *tāni cīvarāni nassanti pi*

S'

V

b: *ḍayhanti pi*

V

c: *undurehi pi khajjanti, [...]*

PERIPHERAL AGENT

V

---

(14) [ ] の補いは筆者による。

‘These robes are destroyed, burned and eaten by rats.’

(8) Peterson (1998: 141-142)

a: [...] tāni cīvarāni naṭṭhāni pi  
                  O          V

b: daḍḍhāni pi  
          V

c: undurehi pi khāyitāni.  
          A          V

‘[...] These robes have been destroyed, burned and eaten by rats.’

Peterson (1998) は (8) b, c 節における cīvarāni の省略を対格型の関係を論じる一例にする。また, (8) a, b 節が A を欠くことから, 過去受動分詞による能格構造では, S, O に比べて, A がそれほど必須でないということも述べている (pp. 109-117, 180-182)。

しかしながら, 定動詞の *nassanti* は受動ではなく逆使役 (anticausative) であり, 「滅びる, 壊れる」を表す。過去受動分詞の *naṭṭha-* はここから派生しているため, 他動詞ではない<sup>(15)</sup>。そのため, (8) a 節の cīvarāni は O ではなく, S と分析されるべきである。 (8) a に A がないのは自動詞文だからである。 *dayhanti* は逆使役の「燃える」と受動の「燃やされる」の両方の解釈が可能だが, 「燃える」の場合は *nassanti* と同じように理解できる<sup>(16)</sup>。

Peterson (1998) は結果構文の観点から, インド・アーリヤ語の能格研究に通時的な面でパーリ語を位置づける研究と言えるのだが, パーリ語の共時的な分析については多くの問題があるため, 再検討が必要になるだろう。

---

(15) *nassati* の他動詞は使役の *nāseti* 「だめにする, 損なう」であり, その過去受動分詞は *nāsita-* である。

#### 4. 3. Hoose (2020)

3つめの先行研究はパーリ語の過去時制にアスペクトの<sup>(17)</sup>区別をたてる Hoose (2020) である。Hoose (2020) によれば、過去時制では過去受動分詞・現在形・過去形の3つの形式によってアスペクトが区別されている。過去受動分詞が完了相と anterior, 現在形が未完了相 (imperfective aspect) を区別している。過去形は文法アスペクトを区別せず、動詞の語彙的アスペクトに沿った意味を表す。<sup>(18)</sup>

しかし、Hoose (2020) にも問題がある。まず、コーパスの小ささである。Hoose (2020) はブッダの前世の物語である Jātaka の第1, 2話をコーパスにしている。これは Pali Text Society 出版の Jātaka 全6巻の内、第1巻の pp. 95-110 にあたり、先の Peterson (1998) よりも小さい。アスペクトの区別の有無は言語

---

(16) もとのテキストを見ると、現在形が使われる (7) は語り、過去受動分詞が使われる (8) は直接話法である (後の引用では、(7), (8) に当たる部分をボールド体で示した)。語りにおける現在形は場面で継続していることや説明などの背景を表す役割を持つ (稲葉 2019b)。テキストでは、ほったらかしにした衣がどうなったかの説明として理解できる。直接話法は発話時が時制の直示中心になるので、過去受動分詞は発話時における衣の状態を表している (本論文の理解による)。

Vin I 109 tena kho pana samayena bhikkhū bhagavatā ticivarena avippavāsasammuti anuññātā ti antaraghare cīvarāni nikkhipanti. **tāni cīvarāni nassanti pi ḍayhantī pi undurehi pi khajjanti**, bhikkhū duccolā hontī lūkhacīvarā. bhikkhū evaṃ āhamsu: kissa tumhe āvuso duccolā lūkhacīvarā ti. idha mayam āvuso bhagavatā ticivarena avippavāsasammuti anuññātā ti antaraghare cīvarāni nikkhipimhā, **tāni cīvarāni natthāni pi daḍḍhāni pi undurehi pi khāyitāni**. tena mayam duccolā lūkhacīvarā ti. 「一方、その時、比丘たちは『世尊によって三衣を欠かないことの承認 (平川 1993: 77-100) が認められている』と考えて、家の中に衣を放り込んでいた。その衣はだめになり、燃えもし/焼かれもし、ネズミにかじられもする。比丘たちはひどいほろで、粗い衣を着るようになっていた。比丘たちは次のように言った。『長寿なる者よ、どうして君たちはひどいほろで、粗い衣を着ているんだ。』『長寿なる者よ、私たちはここで“世尊によって三衣を欠かないことの承認が認められている”と考えて、家の中に衣を放り込んだ。その衣はだめになり、燃えもし/焼かれもし、ネズミにかじられもしている。それで、私たちはひどいほろで、粗い衣を着ている』」。

(17) 個々の動詞が語彙として持っている意味は瞬間的であったり、持続的であったりするのに対し (語彙的アスペクト)、言語によっては文法上の形式によって完了相や未完了相といったアスペクトを区別する (文法アスペクト; Comrie 1976 など)。

の基本的な問題と言えるため、やはり多くの用例に基づいて議論されるべきである。

Hoose (2020) は過去形について、動詞の語彙的アスペクトに沿った意味を表す形式だとしている。一方、稲葉 (2019a, 2020) は過去形を基本的に過去を表す形式とし、文脈や副詞によって現在との関連性が示されれば、*anterior* を表すと理解した。Hoose (2020) と稲葉 (2019a, 2020) で過去形の理解が異なるのは、コーパスの規模と話法の区別の有無が原因だと考えられる。稲葉 (2019a, 2020) は Hoose (2020) より広い範囲の文献を対象にしている。パーリ語は文献言語であるため、コーパスが狭いと集まる用例が偏ってしまう場合がある。それを避けるために、多くの用例から検討されることが必要である。

次に話法の問題がある。時制は発話時を直示中心とするが、語りでは場面を次々に進めていく継起性が主要なはたらきになる。そのため、稲葉 (2019ab, 2020) では時制を調べるにあたって、話法を区別した。

パーリ語の現在形が未完了相であるという主張は、かつて Bechert (1958) によってなされた<sup>(19)</sup>。一方、稲葉 (2019b) は語りにおける現在形と過去形の使われ方について、過去形が場面を継起させていく前景の役割を担い、現在形が前景の背後で継続していることや、説明、補足、解説などをする背景の役割を担っていることを述べた。そしてこのことから、Bechert (1958) の言うアスペクトの区別は、この前景と背景の区別に当たることを指摘した。Bechert (1958) が

---

(18) パーリ語のような文献言語で語彙的アスペクトを調べるのは難しいと思われるのだが、動作の違いが形式の選択に現れていると考えられそうな場合もある。次の例では、座っているブッダに対し、アンバツタが歩いたり立ったまままでいながら話す場面である。歩き回る動作には現在分詞が、立っている状態と座っている状態には過去受動分詞が使われている。

DN I 89-90 *ambaṭṭho pana māṇavo caṅkamanto pi nisinnena bhagavatā kañci kañci kathaṃ sārāṇīyaṃ vīṭisāreti, thito pi nisinnena bhagavatā kañci kañci kathaṃ sārāṇīyaṃ vīṭisāreti.* 「けれども若者アンバツタは経行しながら (歩きまわりながら)、座っている世尊と何かしらの好ましい話を広げ、立ちながら、座っている世尊と何かしらの好ましい話を広げていた」。

(19) Bechert (1958) が過去形を完了相としている点は Hoose (2020) と異なっている。

未完了相としてあげる現在形の例文はどれも語りであり、背景としてのほたらきが理解されるからである。

Hoose (2020) にもこれと同じことが当てはまる。Hoose (2020) が未完了相としてあげる例文はどれも語りであり、現在形はやはり背景を表していると言える。つまり、Bechert (1958) と同様、Hoose (2020) も語りにおける前景と背景の区別をアスペクトの区別として見たのではないかと考えられる。

稲葉 (2019ab, 2020) では、過去形をそれ自体で過去を表す形式とし、現在形を基本的な意味が不定である形式とした。現在形は、過去を表す副詞や文脈との関係がある時に過去を表すことができ、その際には過去形と対立して、動作の習慣・継続・反復を表す。このことから、両方の形式によって第一に区別されているのは、過去かどうかの時制であると言える。もし過去の表現において生まれるこの対立をアスペクトの区別として捉えるならば、それは二次的に生まれたものとして理解されるだろう。

過去受動分詞には態の問題がある。Hoose (2020) は過去受動分詞を完了相と anterior に理解するものの、態の転換をどのように捉えるかについては説明がない。そのため、Hoose (2020) においては態の問題が残ってしまう。

以上のように、パーリ語の過去受動分詞はある程度研究されているものの、それぞれの見方は一面にしか当てはまらず、多くの問題が残されたままだと言える。

## 5. パーリ語の過去受動分詞と結果構文

### 5. 1. 過去受動分詞の受動について

過去受動分詞を難しくしているのは、過去と受動の要素だと言える。前節で見たように、先行研究は過去受動分詞が anterior を表しているという理解で一致している。過去受動分詞が表しているのは単なる過去ではなく、後続する時点に関連する事柄だからである。

受動の方は、他動詞から過去受動分詞が作られると態が変わる。ところが、anterior は態が転換しないため、過去受動分詞を anterior と考えた場合には、態



の転換をどのように捉えるかが問題になる。

先に紹介したように、Hendriksen (1944) は態の転換を “inverted construction” として、Peterson (1998) は能格型として捉えた。どちらも過去受動分詞を受動ではなく、能動文と理解している。しかしテキストには、受動を否定し難い使われ方や、A を欠いた文が少なくない。これらのことは、過去受動分詞の議論においてあまり注目されていないように見えるのだが、過去受動分詞が受動表現として理解される根拠になると考えられる。これらのことを確認していこう。

まず、通常は態の転換が起こらない過去受動分詞が、あえて態を転換している例を見てみよう。比較のため、はじめに、態が転換しない通常の使われ方を確認する。(9) は *gacchati* 「行く」の過去形 *agamamsu* (3人称複数) とその過去受動分詞 *gata-* の例である。定動詞の節では指示詞 *te* が主格複数で定動詞の人称と一致している。過去受動分詞の節を見てみると態は変わらず、指示詞 *te* が過去受動分詞と一致している。

(9) MN I 226 *seyyathā pi bhikkhave ye te usabhā gopitaro gopariṇāyakā te tiriyaṃ gaṅgāya sotam chetvā sotthinā pāraṃ agamamsu, evam eva kho bhikkhave ye te bhikkhū arahanto khīṇāsavā ... vimuttā, te pi tiriyaṃ māraṣṣa sotam chetvā sotthinā pāraṃ gatā.*

比丘たちよ、例えば、牛たちの父であり、牛たちを先導する雄牛たち、彼らがガンジス河の流れを斜めに断ち切って、安全に向こう岸に行ったように、比丘たちよ、まったく同様に、阿羅漢であり、漏が尽きており、…解脱している比丘たち、彼らも悪魔の流れを斜めに断ち切って、安全に彼岸に行っている。

ところが、*gata-*の態が転換する例(10)がある。ここでは(9)と反対に、A は具格 *bhikkhunā* 「比丘」であり、*magga-* 「道」が *gata-* と一致している。*gata-*の態が転換するのは、本論文が対象とした文献の範囲で、(10) だけだった。

どうして態の転換が起こったのだろうか。(10) では、*gata-* とともに *gerundive* の *gantabba-* が使われている。*gerundive* では態が転換し、A は具格か

属格で現れる。ここでは enclitic の 1 人称代名詞 *me* が A である。さらに、*gata-* と *gantabba-* に先立って、過去受動分詞 *kata-* と *gerundive* の *kattabba-* が出てくる。これらの分詞の派生もとである *karoti* 「作る、する」は他動詞であり、過去受動分詞と *gerundive* では態が転換する。(10) はこれら 2 つの動詞の過去受動分詞と *gerundive* を使って、同じ型の表現をしている。

この型に合わせるために、通常は転換しない *gata-* の態が変わったと考えられる。極めてまれな例だが、それ故に、あえて作られた受動文だと言える。(10) には、*karoti* の過去形 *akāsim* (1 人称単数) と現在分詞 *karontassa* (属格単数)、*gacchati* の過去形 *agamāsim* (1 人称単数) と現在分詞 *gacchantassa* (属格単数) も使われている。これらの節で態が変わっていないことと比較してほしい (区別のため、こちらには下線を引いた)。なお、この他に、過去受動分詞 *kilanta-* (*kilamati* 「疲れる」) が使われている。

(10) AN IV 332 *aṭṭh' imāni bhikkhave kusītavatthūni. katamāni aṭṭha. idha bhikkhave bhikkhunā kammaṃ kattabbaṃ hoti. tassa evaṃ hoti kammaṃ kho me kattabbaṃ bhavissati, kammaṃ kho pana me karontassa kāyo kilamissati, handāhaṃ nipajjāmī ti. ... puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhunā kammaṃ kataṃ hoti. tassa evaṃ hoti ahaṃ kho kammaṃ akāsim, kammaṃ kho pana me karontassa kāyo kilanto, handāhaṃ nipajjāmī ti. ... puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhunā maggo gantabbo hoti. tassa evaṃ hoti maggo kho me gantabbo bhavissati, maggaṃ kho pana me gacchantassa kāyo kilamissati, handāhaṃ nipajjāmī ti. ... puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhunā maggo gato hoti. tassa evaṃ hoti ahaṃ kho maggaṃ agamāsim, maggaṃ kho pana me gacchantassa kāyo kilanto, handāhaṃ nipajjāmī ti.*

比丘たちよ、これら 8 つが怠惰に関する事柄である。8 つとはどれか。比丘たちよ、この世で、比丘によって仕事がされるべきである。彼に次のような考えが生じる。「私によって仕事がされるべきだろう。けれども仕事をしている私の体は疲れるだろう。さあ、横になろう」。… 比丘たちよ、次にまた、比丘によって仕事がされてある。彼に次のような考えが生じる。

「私は仕事をした。けれども仕事をしている私の体は疲れている。さあ、横になろう」。… 比丘たちよ、次にまた、比丘によって道が行かれるべきである。彼に次のような考えが生じる。「私によって道が行かれるべきだろう。けれども道を行く私の体は疲れるだろう。さあ、横になろう」。… 比丘たちよ、次にまた、比丘によって道が行かれてある。彼に次のような考えが生じる。「私は道を行った。けれども道を行く私の体は疲れている。さあ、横になろう」。

次に A の不在を取り上げる。(11) では他動詞 *chindati* 「切る」の過去受動分詞 *chinna-* が述語になっている。A は言及されておらず、文脈から補うこともできない。内容の面では、P の *hatthapāda-* 「手足」が注目されている。後で見る (16-18) も A を欠いている。

(11) MN I 523 *seyyathā pi sandaka purisassa hatthapādā chinnā, tassa carato c'eva tiṭṭhato ca suttassa ca jāgarassa ca satatam samitam chinnā va hatthapādā, api ca kho naṃ paccavekkhamāno jānāti: chinnā me hatthapādā ti.*

サンダカよ、例えば、人の手足が切れている／切られている。彼が歩き回る時も、立ち止まっている時も、眠っている時も、目覚めている時も、継続して常に、手足が切れている／切られている。また、彼はそのことを観察して「私の手足が切れている／切られている」と認識する。

先行研究は A が現れる文に注目して能動文としているのだが、A は P とともに他動詞の能動文に必要な項である。Peterson (1998) は、過去受動分詞の能格構造では A を欠くことができると述べているが、(7), (8) で見たように、例文には問題がある。

以上のことから、過去受動分詞は能動文とは言い難く、受動として捉えられるべきだと考えられる。そもそも目的語の結果構文では、他動詞文の P が主語になるという、受動と同じ態の転換が行われる。したがって、過去受動分詞にある受動の性質は、先立つ動作の結果的状态を表すものとして理解されるべき

である。

本論文が扱うテキストは Peterson (1998) と Hoose (2020) がコーパスに選んだものと異なるのだが、検討の範囲は本論文の方が広い。そのため、過去受動分詞の様々な使われ方を集めることができる。とくに (10) のような例はまれで、テキストの広い範囲を調べることで見つかる。こうした使われ方が先行研究の考察に反映されてこなかったことには、注意が必要である。

## 5. 2. 主語の結果構文

それでは、結果構文の観点から過去受動分詞の例文を見ていこう。パーリ語の過去受動分詞には主語の結果構文と目的語の結果構文の使われ方がある。<sup>(20)</sup> さらに、一部の動詞の過去受動分詞は所有の結果構文に当たると考えられる。本論文では基本となる主語の結果構文と目的語の結果構文を扱い、所有の結果構文については改めて論ずることにする。

まず主語の結果構文を見ていく。主語の結果構文は自動詞から派生され、先立つ動作における S の結果的状态を表す。

(12) は、ブッダが自身の老いを語ることばである。過去受動分詞 *jinna-* と *vuddha-* は、それぞれ *jīyati* (*jīyati*)/*jīrati* 「古くなる、老いる」と *vaddhati* 「成長する」から派生している。いずれも状態変化を表す自動詞である。*anuppatta-* は *anupāpuṇāti* 「達する」の過去受動分詞であり、その目的地は *vayo* 「歳」(中性主格/対格単数) である。定動詞では目的地が対格で現れる。過去受動分詞でも態は基本的に変わらない。<sup>(21)</sup> *vayo* は主格と対格が形式上区別されないのだが、*anuppatta-* の語形変化は話し手のブッダと一致しているため、*vayo* は対格に解

---

(20) 結果構文は状態変化を伴う動詞から作られる。本論文の扱った文献の範囲では、*kandati* 「泣く」や *naccati* 「踊る」といった状態変化を表さない動詞は、過去受動分詞を作らない。

(21) 態が転換する場合も数例ある。次の例では、A が 2 人称代名詞の具格単数 *taṃ* で現れている。SN I 56 *sādhu sādhu ānanda. yāvatakaṃ kho ānanda takkāya pattabbaṃ anuppattaṃ taṃ*. 「よきかな、よきかな、アーナンダよ。思考によって達成される限りのことが君によって達せられている」。

釈される。addhagata-「時間に達している」は過去受動分詞 gata- と名詞の複合語である。

(12) DN II 100 **ahaṃ** kho pan' ānanda etarahi **jiṅṇo vuddho** mahallako **addhagato vayo anuppatto**.

アーナンダよ、けれども私は今、老いていて、成長しきっていて、老齢で、時間に達していて、歳になっている。

(13) の過去受動分詞 khīṇa- は煩惱や苦難を意味する āsava- 「漏」(榎本 1978, 1979, 1983) が尽きた状態を表している。(14) はその定動詞 khīyati 「尽きる」の例である。(13) と同じ名詞の āsava- が S であるため、過去受動分詞との派生関係がわかりやすい。(13) の過去受動分詞は、(14) で言われる動作の結果、漏が尽きてなくなっていることを表している。(13) の khīṇāsava- 「漏が尽きている」は過去受動分詞と名詞の複合語である。

(13) AN IV 224 kati nu kho sāriputta **khīṇāsavassa** bhikkhuno balāni, yehi balehi samannāgato **khīṇāsavo** bhikkhu āsavānaṃ khayamaṃ paṭijānāti: **khīṇā me āsavā** ti.

サーリプッタよ、力を備えており、漏が尽きている比丘が「私の漏は尽きている」と漏の消滅を理解する、漏が尽きている比丘の〔その〕力は、いったいどれくらいなのか。

(14) Th 586 evaṃ viharamānassa suddhikāmassa bhikkhuno **khīyanti āsavā** sabbe nibbutiṅ cādhigacchatī ti.

このように過ごしている時、清浄を求める比丘のすべての漏は尽きる。そして寂靜に到達する。

(15) は生死を繰り返す輪廻の過程を思い出す内容である。cuta- は cavati 「移動する、死没する」、upapanna- は upapajjati 「生まれる」の過去受動分詞である。(15) には upapanna- の過去形 upapādim (1 人称単数) が使われているのだが、こ

れが *upapanna-* の先立つ動作と言える。過去形は過去の出来事を表すのに対して、過去受動分詞 *upapanna-* はこの世にいることを表している。*cuta-* は移動してその場にはいないことを表している。

(15) DN I 13-14 so tato **cuto** amutra **upapādiṃ**. tatrāpāsiṃ evaṃnāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evamāhāro evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evamāyupariyanto. so tato **cuto** idhūpapanno ti iti sākāraṃ sauddesaṃ anekavihiṭaṃ pubbe nivāsaṃ anussarati.

「その私はそこから死没<sup>(23)</sup>して、あそこに生まれた。そこで私はこういう名前、こういう姓、こういうヴァルナであり、こういうものを食べ、こういう苦楽を知覚し、こういう寿命の終わりを迎えた。そこから死没して、この世に生まれている」というように、形を伴い、説明を伴った、たくさん並んだ、過去における住居を思い出す。

### 5. 3. 目的語の結果構文

目的語の結果構文は他動詞から派生される。態の転換が起こって自動詞文になり、先立つ動作における P の結果的状态を表す。この点で、目的語の結果構文は受動に関連している。

(16) は、捨ててある *sāṇasutta-* 「麻糸」を見つけた二人連れが手持ちの *sāṇabhāra-* 「麻の荷物」を捨てて、麻糸の方を持っていこうとする場面である。定動詞 *chaḍḍehi* (命令法 2 人称単数)、*chaḍḍessāmi* (1 人称単数未来) 「捨てる」と、その過去受動分詞 *chaḍḍita-* が使われている。定動詞の P は麻の荷物であり、対格を取る。一方、過去受動分詞の節では態が転換している。分詞と一致する麻糸は、先立つ動作「捨てる」の P である。過去受動分詞は麻糸が先立って捨てられた結果として、そこに落ちている状態を表している。

(16) DN II 350 tathh' addasaṃsu pahūtaṃ **sāṇasuttaṃ chaḍḍitaṃ**. disvā

---

(22) 異読に *uppādiṃ*, *udapādi*, *udapādiṃ* がある (DN I 13 n. 5; Cone 2001 s.v. *upapajjati*). すべて *upapajjati* 「生じる」の過去形である。

(23) *cuta-* は限定「死没した私は」にも解釈できる。

sahāyako sahāyakam āmantesi: yassa kho samma atthāya iccheyyāma sāṇaṃ idaṃ pahūtam **sāṇasuttaṃ chaḍḍitam**. tena hi samma tvañ ca **sāṇabhāraṃ chaḍḍehi**, ahañ ca **sāṇabhāraṃ chaḍḍessāmi**, ubho sāṇasuttabhāraṃ ādāya gamissāmā ti.  
彼らはそこで、たくさんの麻糸が捨ててあるのを見た。見てから、連れが連れに話した。「友よ、私たちが麻を求めようとしていた目的である、たくさんの麻糸が捨ててある。友よ、それでは麻の荷物を捨ててくれ。私も麻の荷物を捨てよう。二人で麻糸の荷物を持って行こうじゃないか」。

(17) では、udakādhāna-「水を入れる容器」が絶対分詞の nikujjitvā「ひっくり返して」の P である。その過去受動分詞 nikujjita- は、容器をひっくり返した結果、逆さの状態になっていることを表している。

(17) MN I 414 atha kho bhagavā taṃ **udakādhānaṃ nikujjitvā** āyasmantaṃ rāhulaṃ āmantesi: passasi no tvaṃ rāhula **imaṃ udakādhānaṃ nikujjitaṃ** ti.  
そこで、世尊は水を入れる容器をひっくり返して、長寿なる者ラーフラに話した。「ラーフラよ、君はこの水を入れる容器がひっくり返っているのを見ているかね」。

(18) は、王がブツダの教えを聞いてもダンマに関わる眼（法眼）を得ることができなかった話である。その原因は、王が父である前王を殺害したという自らの行いによって傷つき、痛めつけられた状態にあるためだと言われる。(18) の過去受動分詞 khata- (khanati「傷つける」) と upahata- (upahanti「打つ、害する」) がこのことを表している。

(18) DN I 85-86 atha kho bhagavā acirapakkantassa rañño māgadhasa ajātasattvedehiputtassa bhikkhū āmantesi: **khatāyaṃ** bhikkhave **rājā**, **upahatāyaṃ** bhikkhave **rājā**. sacāyaṃ bhikkhave rājā pitaraṃ dhammikaṃ dhammarājānaṃ jīvitā na voropessatha, imasmiṃ yeva āsane virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ uppajjissathā ti.

そこで世尊は、マガダ国王アジャータサットウ、ヴェーデーヒーの息子が

出発してまもなく、比丘たちに話した。「比丘たちよ、<sup>(24)</sup>あの王は傷ついている。比丘たちよ、あの王は害されている。比丘たちよ、もしあの王がダンマに適った父、ダンマにのっとった王を生命から引きずり降ろさなければ、まさにこの席ではこりなく、汚れを離れた法眼が生じたらうに」。

目的語の結果構文は A を伴うこともある (Nedjalkov and Jaxontov 1988: 49-53)<sup>(25)</sup>、パーリ語で A が言及される場合は具格か属格で標示される。enclitic の人称代名詞が使われることも多い。enclitic の人称代名詞には、形式上、具格と属格の区別がないのだが、注釈書がそれを具格か属格に言い換えて注釈することがある。

(19) は、具格の bhagavatā 「世尊」が過去受動分詞 baddha- の A である。直前の節には baddha- の定動詞 bandheyya 「捕まえる」(希求法 3 人称単数) が出てくる。P は対格の ummujjamānaka- 「出てきつつある、出てきた」である。過去受動分詞の節では、態が転換し、P である話し手 (1 人称代名詞) が主格で、分詞と一致している。

(19) AN II 182 seyyathā pi bhante **ummujjamānakaṃ** yeva mahatā pāsena **bandheyya**, evam eva kho **ahaṃ** bhante **ummujjamānako** yeva **bhagavatā**

---

(24) 指示詞 idam (男性主格単数 ayam) は近称とされ、辞書では「これ、この」という訳が当てられてきたため、(18) で「あの」と訳したことは奇妙に感じられるかもしれない。しかし、稲葉 (2022) はパーリ語の指示詞の基準が距離ではないと考えられることを示した。idam は、話し手が発話あるいは対話の場にあると認める対象を指す。発話／対話の場というのは、空間的な位置関係に限らず、テリトリーや話題なども含んでいる。日本語の指示詞はパーリ語と異なるので、(18) の文脈に合いそうな日本語の指示詞を訳に使った。(18) で idam が使われる文脈は、指示対象の王が「出発して間もなく」であり、聞き手はこれまでの会話に参加していなかった比丘たちである (会話を聞いてはいた)。王がどれくらい遠ざかったかはわからないのだが、この文脈で idam が使われているということは、空間的にそれほど離れていないか、あるいは王が話題の中心であると考えられる。日本語では、筆者の印象として、このような場面だと指示詞アがよさそうに感じられた。

(25) Nedjalkov and Jaxontov (1988: 51-52) によれば、A の表現はインド・ヨーロッパ語以外の言語ではないようである。



mahatā vādapāsenā **baddho** ti.

それは例えば、尊き君よ、〔水から頭が〕<sup>(26)</sup>出てきたものを大きなわなで捕まえるように、まったく同様に、尊き君よ、出てきた私は、大きなわなで世尊に捕まっている。

(20) はブッダの入滅の話である。弟子のアーナンダはブッダの病気が心配なのだが、僧団に何も示さない間は入滅しないだろうと安心する。するとブッダは、これまでの説法のことや老齢であることをあげ、入滅が近いことを示唆する ((12) も同じ文脈である)。教えがすべて説かれているということが入滅の条件、あるいは動機の1つになっている。具格の1人称代名詞 *mayā* が A である。(21) は、(20) の過去受動分詞 *desita-* の定動詞 *deseti* 「示す」の例である。定動詞の P は (20) と同じ名詞 *dhamma-* 「ダンマ、教え」であるため、派生関係がわかりやすいと思われる。

(20) DN II 99-100 *api ca me bhante ahosi kācid eva assāsamattā, na tāva bhagavā parinibbāyissati na yāva bhagavā bhikkhusaṃghaṃ ārabhha kiñcid eva udāharatī ti. kim pan' ānanda bhikkhusaṃgho mayi paccāsimsati. desito ānanda mayā dhammo anantaraṃ abāhiraṃ karitvā.*

「けれども、尊き君よ、私には、あるわずかな安心が生まれました、『世尊が比丘サンガに関して何も告げない限り、世尊は般涅槃しないだろう』と」。 「アーナンダよ、けれども比丘サンガは私に何を望むのだね。アーナンダよ、私によってダンマが示されてある、内に秘めもせず、外向きにもせずに」。

(21) MN I 235 *buddho so bhagavā bodhāya dhammaṃ deseti.*

かのブッダ、世尊はさとりに向けてダンマを示す。

(22) では、enclitic の1人称代名詞 *me* が過去受動分詞 *kata-* (*karoti* 「する、作

---

(26) [ ] の補いは注釈書にしたがった。Mp III 166 *ummujjamānakaṃ yevā ti udakato sīsaṃ ukkhipantaṃ yeva.* 「“ummujjamānakaṃ yeva” とは、水から頭を出している」。

る)のAになっている。その注釈である(23)は、meをmayāに言い換えて説明している。

(22) AN II 73 **katā me rakkhā katā me parittā**.<sup>(27)</sup>

私によって保護がしてある。私によって守護がしてある。

(23) Mp III 104 **katā me rakkhā katā me parittā ti mayā** ettakassa janassa rakkhā ca parittānañ ca **katam**.

“katā me rakkhā katā me parittā”というのは、私によってこれだけの人々の保護と守護がしてある。

## 6. まとめ

本論文は、パーリ語の過去受動分詞が結果構文として理解されることを述べた。先行研究は、過去受動分詞を主に anterior と理解してきた。他動詞から派生された過去受動分詞は態が転換するのだが、先行研究ではこれを受動とせず、能動文として捉える場合がある。

本論文では過去受動分詞に結果構文の観点を持ち込んだ。結果構文は先立つ動作によって生じた後続時点における結果的状态を表す。他動詞から派生される場合は態が転換して自動詞文になる。本論文では、自動詞から派生される主語の結果構文と、他動詞から派生される目的語の結果構文がパーリ語の過去受動分詞に当てはまることを述べた。

【謝辞】本研究はJSPS 科研費 21K12844 の助成を受けたものである。

### ・参考文献

AN = Morris, Richard, E. Hardy, and A. K. Warder. 1888-1961. *The Āṅguttara-Nikāya*. 5 vols. London: Pali Text Society.

Bechert, Heinz. 1958. “Über den Gebrauch der indikativischen Tempora im Pāli.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 3: 55-72.

---

(27) 同じ文が Ja II 147 v. 105 では韻文として伝わっている。

- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols. 2011. "Case Marking and Alignment." In Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of Case*, 304-321. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan L. and Östen Dahl. 1989. "The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World." *Studies in Language*, 13(1): 51-103.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cone, Margaret. 2001. *A Dictionary of Pāli*, part 1. Oxford: Pali Text Society.
- Dahl, Eystein and Krzysztof Stroński (eds.). 2016a. *Indo-Aryan Ergativity in Typological and Diachronic Perspective*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . 2016b. "Ergativity in Indo-Aryan and beyond." In Eystein Dahl and Krzysztof Stroński (eds.), *Indo-Aryan Ergativity in Typological and Diachronic Perspective*, 1-37. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DN = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 2006-2020. *The Dīgha-Nikāya*. 3 vols. Lancaster and Bristol: Pali Text Society.
- 榎本文雄 1978 「āsrava について」『印度學佛教學研究』27(1): 158-159.
- 1979 「āsrava (漏) の成立について—主にジャイナ古層経典における—」『佛敎史學研究』22(1): 17-42.
- 1983 「初期仏典における āsrava (漏)」『南都佛敎』50: 17-28.
- Geiger, Wilhelm. 1916. *Pāli Literatur und Sprache*. Strassburg: K. J. Trübner (translated into English by Batakrishna Ghosh, revised and edited by K. R. Norman, *A Pāli Grammar*, 2000, Oxford: Pali Text Society).
- Haspelmath, Martin. 1994. "Passive Participles across Languages." In Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.), *Voice: form and function*, 151-177. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Hendriksen, Hans. 1944. *Syntax of the Infinite Verb-forms of Pāli*. Copenhagen: Einar Munksgaard.
- Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindisch im Überblick*. Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 平川 彰 1993 『二百五十戒の研究』第2巻 東京：春秋社.
- Hoose, Anahita. 2020. "Presenting the past in Middle Indic." *Indo-European Linguistics*, 8: 205-253.
- 星 泉 2016 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて—』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 稲葉維摩 2019a 「パーリ語の直説法現在とアオリスト」『佛敎學セミナー』109: 67-87.
- 2019b 「パーリ語の物語における現在時制と過去時制」『佛敎學セミナー』110:

- 55-73.
- 2020 「パーリ語の時制における āha, āhu, āhamsu」『真宗文化：真宗文化研究所年報』29: 17-36.
- 2022 「パーリ語の指示詞 idam, etam, adum/amum の現場指示用法について」『真宗文化：真宗文化研究所年報』31: 1-34.
- Ja = Fausbøll, V. 1877-1896. *The Jātaka: together with its commentary, being tales of the anterior births of Gotama Buddha*. London: Trübner.
- Maslov, Jurij S. 1988. "Resultative, Perfect, and Aspect." In Vladimir P. Nedjalkov (ed.), *Typology of Resultative Constructions*, 63-85. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 水野弘元 1955 『パーリ語文法』東京：山喜房佛書林.
- MN = Trenckner, V. and Robert Chalmers. 1888-2016. *The Majjhima-Nikāya*. 3 vols. London and Bristol: Pali Text Society.
- Mp = Walleser, Max and Hermann Kopp. 1924-1956. *Manorathapūraṇī: Buddhaghosa's commentary on the Aṅguttara-nikāya*. 5 vols. London: Pali Text Society.
- 長野泰彦 1989 「Ⅲ. チベット語（文語）」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一（編）『言語学大辞典』第2巻 世界言語編（中）, 761-766. 東京：三省堂.
- Nedjalkov, Vladimir P. and Sergej Je. Jaxontov. 1988. "The Typology of Resultative Constructions." In Vladimir P. Nedjalkov (ed.), *Typology of Resultative Constructions*, 3-62. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Oberlies, Thomas. 2019. *Pāli Grammar: The Language of the Canonical Texts of Theravāda Buddhism*, 2 vols. Bristol: Pali Text Society.
- Peterson, John M. 1998. *Grammatical Relations in Pāli and the Emergence of Ergativity in Indo-Aryan*. München and Newcastle: LINCOM Europa.
- . 1999. "Grammatische Relationen im Pāli und die Entstehung von Ergativität im Indoarischen." *Historische Sprachforschung*, 112: 227-263.
- SN = Feer, Léon. 1888-2008. *Samyutta-Nikāya*. 5 vols. London and Oxford: Pali Text Society.
- Th = Oldenberg, Hermann, Richard Pischel, K. R. Norman, and L. Alsdorf. 1966. *The Therā and Therī-gāthā: Stanzas Ascribed to Elders of the Buddhist Order of Recluses*. London: Pali Text Society.
- Vin = Oldenberg, Hermann. 1879-1883. *The Vinaya Piṭakam: one of the principal Buddhist holy scriptures in the Pāli language*. 5 vols. London: Williams and Norgate.